

—常設展示解説—

# 上田地方の古代文化



信州大学附属図書館



<10>0020790572

上田市立信濃国分寺資料館

—常設展示解説—

# 上田地方の古代文化

上田市立信濃国分寺資料館



常設展示室



古代寺院の軒先模型



古墳時代の常設展示



他田塚古墳石室模型



春の信濃国分寺跡史跡公園（尼寺跡）



春の信濃国分寺跡史跡公園（藤壇）



信濃国分寺跡史跡公園（僧寺講堂跡）



僧寺講堂跡に残る奈良時代の礎石



ケヤキが紅葉した秋の信濃国分寺跡史跡公園



冬の信濃国分寺跡史跡公園（回廊式休憩所）

## はじめに

今から約1,250年前、聖武天皇の発願によって、各国ごとに国分寺（僧寺と尼寺）が建てられました。この国分寺は、国家の繁栄と国民の幸福を祈ることを目的とした國の寺（官寺）でした。

昭和5年11月に国の史跡指定を受けた信濃国分寺跡では、上田市が国・県の指導を得て昭和38年から昭和46年にかけて、大規模な学術調査を実施しました。その結果、僧寺と尼寺の建物跡とその全容が明らかにされ、さらに瓦窯（瓦を焼いたかま）跡まで発掘されるという成果を収めました。この間、昭和43年3月には調査地一帯が史跡の追加指定を受け、信濃国分寺跡史跡公園として整備を重ねて今日に至りました。

この信濃国分寺資料館は、その発掘調査によって出土した信濃国分寺跡関係資料を中心として、上田・小県地方の原始・古代から中世にいたる資料を一堂に展示し、この地方の歴史を学ぶ場として整備を重ねて今日に至りました。

## 目 次

上田盆地の自然	1
上田盆地の古代	2
狩猟の時代	4
土器のはじまり	11
稻作のはじまり	17
くにのはじまり	22
古代の信濃	27
仏教信濃へ	33
信濃国分寺	34

## 凡 例

1. この冊子は昭和56年に発行した『展示解説』に改訂を加え、「上田地方の古代文化」と改題し、上田市立信濃国分寺資料館の常設展示理解のため作成した冊子の第3版です。写真をカラー化し、新資料の紹介や内容の改訂を行いました。
2. 常設展示は、上田地方の原始時代から古代までを「狩猟の時代」「土器のはじまり」「稻作のはじまり」「くにのはじまり」「古代の信濃」「仏教信濃へ」「信濃国分寺」の7区分で展示しています。
3. 展示は、より多くの資料をご覧いただけるよう、展示替えを行っています。したがって、この解説書に収録してあるものは当館の基本的な展示資料です。なお信濃国分寺からは貴重な史料をご寄託いただき、住職の塙入法道氏（大正大学教授）から種々ご教示いただきました。
4. 掲載されている写真や図版の縮尺は不同です。なお第3版発行に際して、川上元氏（大妻女子大学非常勤講師）から写真のご提供をいただきました。
5. 信濃国分寺資料館に資料を提供された方々、並びに関係機関に対しまして、厚く御礼申し上げます。なお第3版の解説・編集は倉沢正幸（当館館長）が担当しました。

# 上田盆地の自然



〈大屋上空から千曲川下流を写す〉  
○印は信濃国分寺跡史跡公園

## 上田地方の地形と地質

上田・小県地方は長野県の北東部にあたり、標高約450mから2,300mにおよぶ盆地性平野と山地・山麓をもつ地域です。中央に上田盆地が開け、この盆地の南東より北西にかけて千曲川が流れています。上田盆地は、千曲川の北側に広がる川東平野と千曲川の西側の川西平野とに分けられますが、この上田盆地に鳥帽子山麓地域と依田川流域を加えて、上田・小県地方と呼ばれています。

また、この地方の地質は、第三紀層や火山などによる新しい地層や火山岩から成り立っています。

## 上田地方の気候

上田地方の気候の特色は、夏と冬の気温のちがいや、昼と夜の温度のちがいが大きいことと、一年中の雨量がきわめて少なく、とくに冬には晴天が続くなどの点があります。このような気候を内陸的気候といいますが、上田地方は全国的にみて、この内陸的気候の代表的な地域といわれています。

## 上田盆地の古代

上田・小県地方に最初に人が住みついたのは、今からおよそ2万年ぐらい前といわれています。これらの人々の生活したあとは、和田峠周辺や菅平高原などの標高1,000mをかぞえる高い場所に発見されていますが、この時代を旧石器時代と呼んでいます。

約1万年ぐらい前から縄文時代になりますが、この時代には土器が発明され、これによって食物の煮たきができるようになりました。また、いろいろな信仰に関する資料もみられ、人々の生活は一段と豊かになったと考えられます。

次の弥生時代になると、米づくりが行われるようになり、人々は大きな川の近くの平野に住居を営むようになりました。

各地に大きな墓としての古墳が造られるようになった古墳時代には、すでに各地の豪族が大きな勢力をもってきます。

古代の科野国と呼ばれた地域は、千曲川の肥沃な沖積地を中心に拡大していったと考えられますが、この時代には東山道が開通し、大和朝廷の勢力が科野（信濃）にも入ってきました。

大和朝廷の任命した、科野国造もこの上田地方を根拠地としていたことが知られていますし、国司のいた最初の信濃国府もこの地にあったといわれており、当時の信濃の政治と文化の中心であったといえます。

信濃へ入った仏教は、はじめ各地の豪族の間で信仰されており、長野市の善光寺はそのもっとも大きなものといわれています。

ところが、今からおよそ1,200年前の奈良時代に、聖武天皇の詔によって国ごとに国分寺が建てられるようになりました。これは仏教を国の宗教とし、国の繁栄と国民の幸福を祈ることを目的としたものでした。

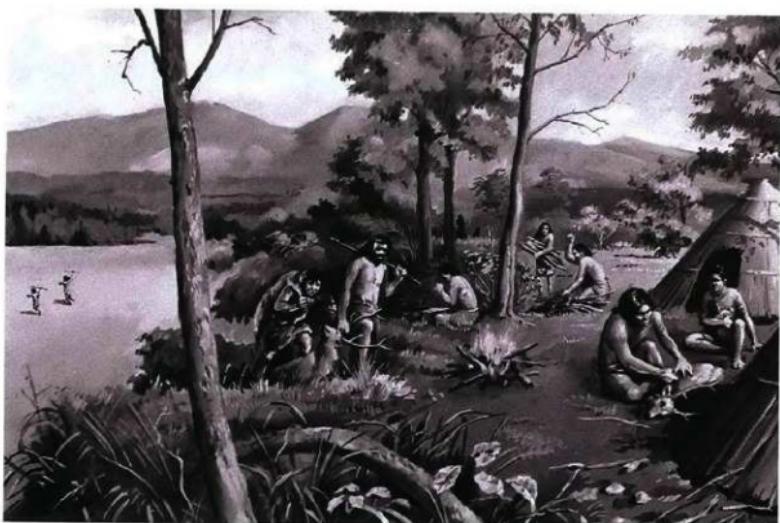
—遺跡分布模型ナレーションより—



史跡整備された信濃国分寺跡（昭和54年頃撮影・上田小県誌刊行会蔵）

信濃のあゆみ

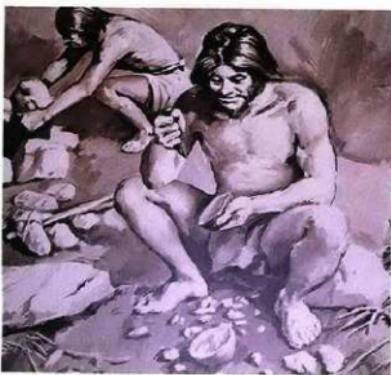
## 狩獵の時代



旧石器時代の人々の生活

## 旧石器時代のくらし

人類が地球上に出現したのは、今から約600万年前といわれています。そのころから、約13,000年前までの長い期間を旧石器時代と呼んでいます。この時代は寒暖の差が激しく、火山の噴火もいたるところで起って、きびしい自然環境でした。ナウマン象やオオツノジカなども生息していて、旧石器時代の狩の対象になっていました。上田盆地でこれらの人々の生活のあとがたしかめられるのは、今からおよそ3万年前からの後期旧石器時代の遺跡です。



黒耀石などの石材を打ちかいて石器を作る

## 菅平遺跡群

上田市の東北部に位置する菅平高原は、標高1,200～1,500mの高冷地です。

ここには、学校敷地遺跡、原谷地A・B遺跡など11ヶ所の旧石器時代の遺跡が知られていますが、これらはまとめて、菅平遺跡群と呼ばれています。これらの遺跡は、菅平高原中央部の湿地帯の周辺や、山麓斜面に分布しています。



菅平遺跡群遺景（上田市菅平高原）

## 男女倉遺跡群



男女倉B遺跡（長和町）

霧が峰、鷲が峰に源を発する男女倉川によって形成された渓谷状地帯に営まれた遺跡群を男女倉遺跡群と呼びます。標高1,200mほどの男女倉川両岸の段丘や台地に遺跡が点在しています。この地は、本州でも有数の黒耀石の産地で周辺の山々には黒耀石の露頭が数多くみられます。男女倉の人々は、これらの黒耀石で石器を作っていました。黒耀石製の槍先形尖頭器・ナイフ形石器・撲器・彫刻器・石刃・細石刃・石刃核・細石刃核などが出土し、茂呂系ナイフ文化に属

する資料とされています。

## 鷹山遺跡群

大門川支流の鷹山川上流の盆地状の地形にいくつかの旧石器時代の遺跡が点在しており、これらを総称して鷹山遺跡群と呼びます。

この鷹山の近くに、黒耀石原産地の星ヶ峠があり、この黒耀石を加工して石器を作っていました。発掘調査によると、ナイフ形石器、槍先形尖頭器、撲器・削器・彫刻器・細石刃・石刃・石刃核・細石刃核などが出土しています。



鷹山遺跡群（長和町）

## 石の道具

旧石器人は黒耀石などの石材を打ちかいて作った「石器」をおもな道具として生活していました。長和町の男女倉や長和町と諏訪郡の境の和田峠周辺は、日本の代表的な黒耀石の産出地として知られています。旧石器人はこの黒耀石などを打ちかいた鋭い縁を刃として、いろいろな石器に仕上げていました。とくに男女倉遺跡には、各地に石器を供給したと思われる石器製作のあとがみられます。

また上田市菅平高原の菅平小中学校敷地内にある菅平学校敷地遺跡からは、貝岩製の石刀・剥片・握斧状石器や、握斧状石器あるいは石刀核とみられる合計4点の石器が昭和27年に発見されました。これらの石器は東北地方に広く分布する東山系ナイフ文化に属する旧石器時代の資料とされています。



剥片



石刃



握斧状石器



握斧状石器 (石刀核)  
菅平学校敷地遺跡出土石器



細石刃核  
(堀口ノ一遺跡)



小形器  
(大郷遺跡)

(上田市内出土)



磨山遺跡群出土石器

男女倉遺跡群出土石器



石核



石刃



細石刃・細石核



ナイフ形石器



ラウンド・スクレイバー



エンド・スクレイバー



彫刻器



錐



尖頭器



尖頭器



くさび形石器



局部磨製石矛



骨で皮に穴をあける。



ナイフ形石器で肉を切る。



楔形で木を切る。



棒頭で肉を割り取る。



尖頭器で石器を作る。



彫刻器で骨を彫る。



楔形で木を削る。



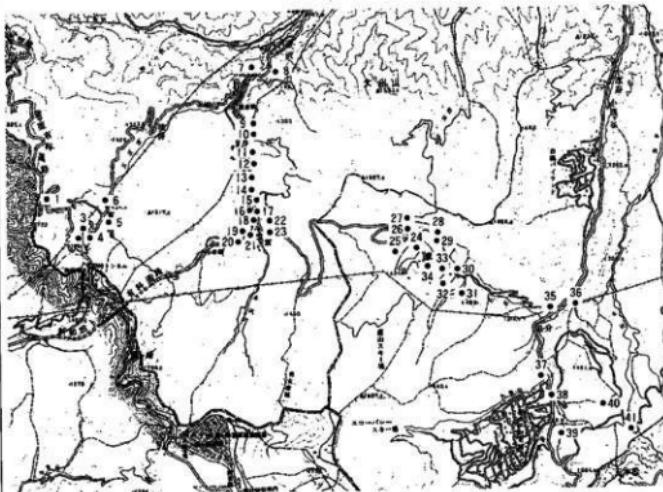
尖頭器を突いた縫

A 菅平

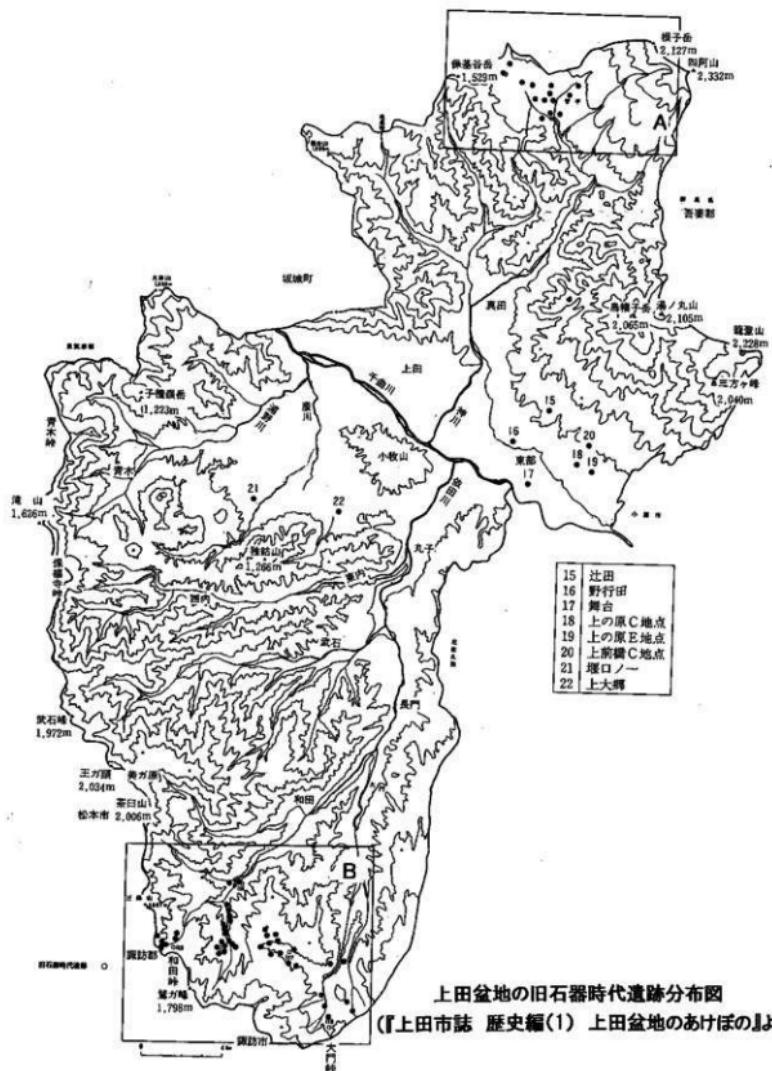
- |    |        |
|----|--------|
| 1  | 石戸山    |
| 2  | 西組D    |
| 3  | 西組A    |
| 4  | 学校敷地   |
| 5  | 南組A    |
| 6  | 小島沖    |
| 7  | 東組B    |
| 8  | 星教畠    |
| 9  | 唐沢B    |
| 10 | 三日城    |
| 11 | 星谷堆A   |
| 12 | 星谷堆B   |
| 13 | 唐沢D    |
| 14 | 旧試験場西口 |



- |    |                       |
|----|-----------------------|
| 1  | 和田山II                 |
| 2  | 和田峠B地点                |
| 3  | 和田山I                  |
| 4  | 和田峠A地点                |
| 5  | 東組屋                   |
| 6  | 小沢沢                   |
| 7  | ヘイゴゴーロ                |
| 8  | 男女倉II地点               |
| 9  | 男女倉B地点                |
| 10 | 男女倉C地点                |
| 11 | 男女倉D地点                |
| 12 | 男女倉E地点                |
| 13 | 男女倉I地点                |
| 14 | 男女倉F地点                |
| 15 | 男女倉IV地点               |
| 16 | 男女倉J地点                |
| 17 | 男女倉I地点                |
| 18 | 男女倉J地点                |
| 19 | 男女倉II地点               |
| 20 | 男女倉G地点                |
| 21 | 男女倉II地点               |
| 22 | 男女倉III地点              |
| 23 | 男女倉A地点                |
| 24 | 巣山I<br>〔I.地点、S<br>地点〕 |
| 25 | 巣山II                  |
| 26 | 巣山III                 |
| 27 | 巣山IV                  |
| 28 | 巣山V                   |
| 29 | 巣山VI                  |
| 30 | 巣山VII                 |
| 31 | 巣山VIII                |
| 32 | 巣山IX                  |
| 33 | 巣山X                   |
| 34 | 巣山XI                  |
| 35 | 追分                    |
| 36 | ズミ                    |
| 37 | 大蛇口                   |
| 38 | コマツバ                  |
| 39 | 標ノ木平                  |
| 40 | 高萩                    |
| 41 | 割�                    |



B 男女倉・巣山・和田峠



## 唐沢B遺跡出土品（長野県宝）

唐沢B遺跡は上田市菅平高原にあり、標高1,260mの唐沢川右岸の平坦面に位置しています。昭和43（1968）年に調査が実施され、尖頭器（先が尖った石器で石槍などに用いる）、撓器（かきとり）、抉るために用いる）、削器（ものを削り、切るのに用いる）、石刃（細長い石片で石器の素材となる）、剥片（薄くはぎとった石片で、石器製作に用いる）、打製石斧、局部磨製石斧（木材の伐採や加工、土を掘ったり動物の解体に用いる）、砥石などが36点出土し、このうち32点が長野県宝に平成12年に指定されました。石器は未使用のものと推定され、今から13,000年ほど前の縄文時代草創期の貴重な資料とされています。

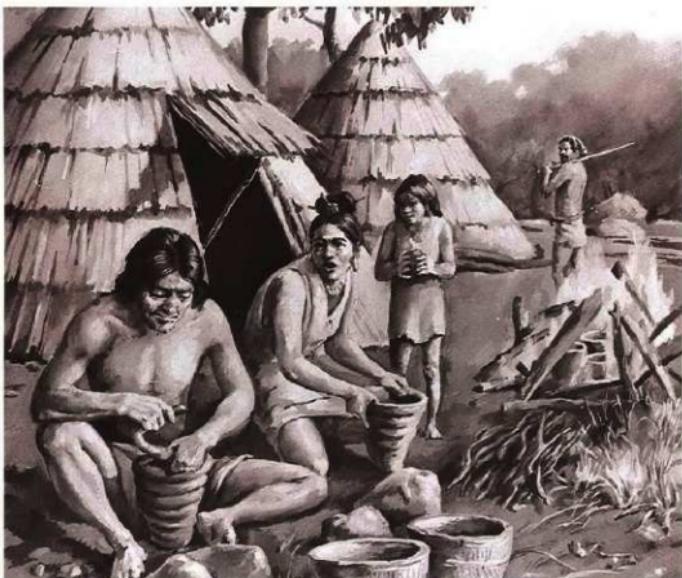


唐沢B遺跡出土石器  
(長野県宝)



唐沢B遺跡調査状況

# 土器のはじまり



縄文時代の人々の生活

## 縄文時代のくらし

今からおよそ13,000年前には、気候は次第に温暖になってきました。人々はまだ狩をしたり魚をとったり、植物の実をとったりして生活していましたが、住居は地面を掘って作った竪穴住居などに住んでいました。とくにこの時代には土器を考えだされ、食物の煮たきがその土器でできるようになりました。また、弓や矢の使用などによって狩の技術が発達し、人々の生活もいっそう豊かになってきました。

縄文時代は土器の型式や特徴などから、草創期（約13,000年前～約10,000年前）・早期（約10,000年前～約6,000年前）・前期（約6,000年前～約5,000年前）・中期（約5,000年前～約4,000年前）・後期（約4,000年前～約3,000年前）・晩期（約3,000年前～約2,400年前）の6期に大きく区分されています。



上田市新町・十人の検田見遺跡出土深鉢  
(縄文時代中期中葉の土器)

## 縄文時代の集落

この時代の初めには、まだ小規模な集落しかみられませんが、前期以降になると定住性のある大きな集落がつくられました。

大きな円形の広場をかこんで住居が建てられ、住居の多くは円形ないしは楕円形で、中央に炉をもつてある整穴住居でした。

集落は日当たりのよい、食料の得やすい場所が選ばれました。上田・小県地方では、鳥帽子山麓に大遺跡群がひろがっています。なお上田市の八千原遺跡では、中期から後期の大規模な集落遺跡がみつかっています。



八千原遺跡（柄鏡形敷石住居跡）（上田市漆戸）



八千原遺跡（整穴住居跡（上）・住居の炉跡（下））（上田市漆戸）



八千原遺跡（敷石住居跡）〈上田市漆戸〉

## 縄文土器

縄文時代に作られた土器は、その表面に縄目の文様が付けられることが多いため、縄文土器と呼ばれています。質素な文様の土器からかぎりの多い美しいものまで、各時期によって異なったものが作られました。そのかたちも始めのものは「とんがり底」の深鉢ですが、次第にすわりのよい「平底土器」へとかわり、さらに使いみちに応じた壺・鉢・皿・土びん（注口土器）など、いろいろな土器が作られ、使われました。



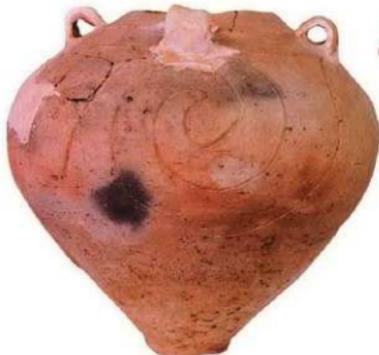
上田市手塚の堰口ノ一遺跡出土深鉢  
(縄文時代中期中葉の藤内式土器)

## 上田地方の縄文土器



有孔鉢付土器は口縁部の周囲に  
小さい穴と鉢が付き、その用途  
は種子保存容器・酒造器・太鼓  
の諸説があります。

上田市八千原遺跡出土有孔鉢付土器（中期中葉）



上田市八千原遺跡出土浅鉢  
(後期前葉の掘之内I式土器)

上田市林之郷遺跡出土四耳付甌 (後期初頭)



上田市下前冲遺跡出土土器（後期（向かって左）・晩期（右）の土器）  
晩期には東北地方の亀ヶ岡土器文化の影響がみられます。

## 縄文時代の道具

旧石器時代にくらべると、自然環境は大きく変わりました。それにつれて、人々の用いた道具も著しい進歩がみられます。

動物を捕る道具（弓矢など）、植物を採る道具（石斧など）、魚を捕る道具（網や釣針）などが使われています。また、生活を豊かにする道具（土器・木や皮で作られた生活用具・耳飾りや櫛などの装飾品）も数多く考えだされました。



上田市八千原遺跡出土石鏃  
(石製の矢じり)

上田市前山出土有舌尖頭器（草創期）  
基部に舌状の茎をつくりだし、投槍  
説が有力です。



上田市下前沖遺跡出土石鎌 (石製のキリ)



上田市八千原遺跡出土打製石斧  
植物の根などを掘る土掘り具の  
用途が考えられています。

上田市下前沖遺跡出土土製耳飾り (後・晩期)

## 縄文時代の墓制

縄文人は横円形に掘られた「土塙」と呼ばれる穴に埋葬されるのが普通ですが、この時代の終わりごろになると、石を組み合わせて作った石棺もみられます。また、幼児を甕に入れて葬る甕墓も一般化してきます。



上田市大道下遺跡出土三角墳形土製品

縄文時代中期に北陸や東日本に分布する横断面が三角形の土製品で、呪術に関係した資料とみられますが用途は不明です。



上田市殿城堂下出土土偶（中期）

## 呪術と信仰

自然にたよって生活していた縄文人は、自然を信仰の対象としていました。生命の安全を願うための土偶、氏族の繁栄を祈る石棒、魔力から人々を守る土版や岩版それに石剣や石刀なども用意されました。また、装飾具を多く身に付けた人や、前歯を故意に抜き取った抜歯という風習もみられます。これらは、単なる飾りではなく、儀礼的な意味をもっていました。

土偶は土製の人形で破損した状態で出土することが多く、病気や痛みをなoshiratori、死と再生の儀式に用いたなど諸説があります。

## 縄文時代から弥生時代へ

縄文時代の中ごろには遺跡の数も多くなり、人口も増加したと考えられます。しかしこの時代の終りに近づくと遺跡もきわめて少なくなっています。これは人口の増加とともに、<sup>かり</sup>狩や植物の採集などでは、人々の生活をまかなえるだけの食糧を得ることがむずかしくなってきたからです。これをのりこえるために縄文人は、食物を栽培することを考えだしました。米づくりを受け入れる準備がすでにできてきていたと思われます。



上田市下前沖遺跡出土石剣（後・晚期）

石剣は後期後半から晩期の東日本で多く出土し、棒状をしており、呪術的な資料とみられています。

# 稻作のはじまり



弥生時代の集落と水田

## 弥生時代のくらし

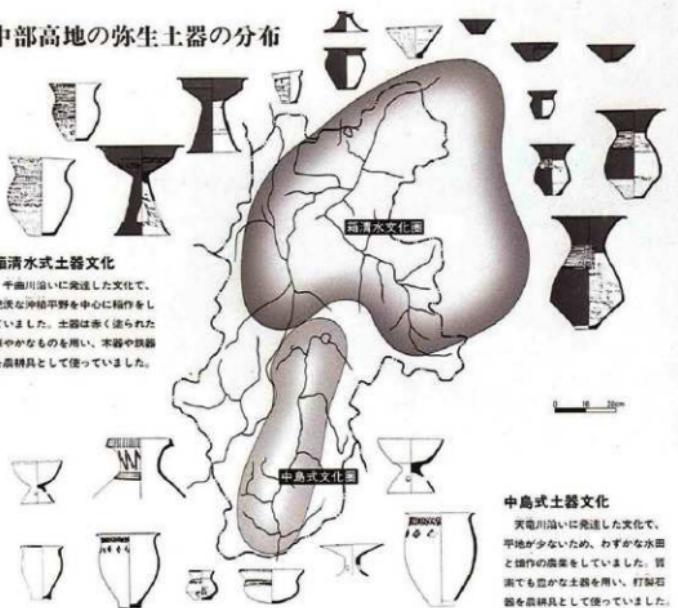
弥生時代の特色は、「米づくり」や金属器の使用が始まることといえます。人々は水田耕作に適した低地に集落を営むようになりました。この時代には、自分で食べ物をつくりだすことができるようになって生活が安定し、いままでの原始的な集団が次第に統合されてきたと考えられます。弥生時代の終りごろには集団の中が支配するものと支配されるものとに分かれ始め、「くにの統一」への道を歩み始めた時代でした。

弥生時代は土器の変遷や大陸からもたらされた青銅器の年代などから、大きく前期・中期・後期の3期に区分されています。前期は紀元前5世紀から紀元前2世紀、中期は紀元前2世紀から紀元1世紀、後期は紀元1世紀から3世紀に区分されています。なお、近年放射性の炭素14による年代測定により、弥生時代前期のはじまりを紀元前800年とする説も出されています。



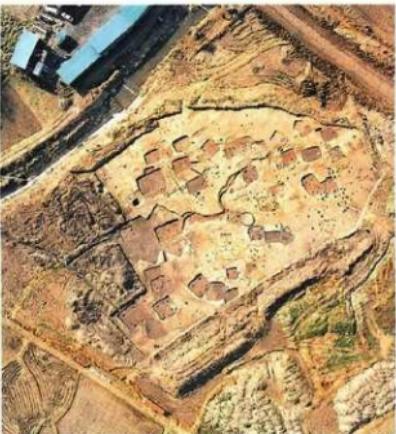
弥生人のむら（模型）

## 中部高地の弥生土器の分布



## 信濃の弥生文化

信濃に入ってきた最初の弥生文化は、東海地方から天竜川をさかのぼって、各地に「米づくり」の技術をもたらしました。そのため、初期の弥生文化的遺跡は、天竜川流域に多くみられます。また、弥生時代の中ごろから終りになると、信濃の各地の低湿地に多くの遺跡がみられます。とくに弥生時代の終りには、天竜川水系の  
 中島式土器文化と千曲川水系の箱清水式土器文化とよばれるそれぞれ内容のちがった文化圏がありました。



岳の鼻遺跡の弥生時代後期の集落跡(上田市下室賀)

## 箱清水式土器

長野市箱清水から出土した、弥生時代後期中葉から末葉にかけての土器群を、その名称をとって「箱清水式土器」といいます。この土器群はその後の研究で千曲川流域を中心とした広い地域に発達した弥生時代後期文化が残したものとわかりました。器形には、壺・高杯・鉢・蓋・甕などがあり、それ以前の土器にくらべると器種の分化も著しく、器形・文様も一化されてきます。文様は壺と甕に描かれるだけで、壺・高杯・鉢などの土器には器面が赤く塗られています。このように、独自の方法で描かれた文様（中部高地型櫛描文）と器面を赤く塗る手法が特徴的です。上田市内では和手遺跡（中野）、岳の鼻遺跡（下室賀）、下町田遺跡（常田）などから多数出土しています。



甕（和手遺跡）



箱清水式土器出土状況（岳の鼻遺跡）



高杯（向かって左・和手遺跡 右・天神遺跡）



（赤い色は酸化第二鉄（ベンガラ）でつけられている）



壺（下町田遺跡）

## 弥生時代の道具と技術

すいとうのうこう 水稲農耕がはじまると、農具や灌溉技術を中心として著しい進歩がみられます。

縄文時代にひきつづき石の道具も使われますが、大陸から鉄の技術が伝わりこれで加工した木器が発達しました。また青銅器も伝わりましたが、これは主に共同体の祭祀に用いられました。

弥生時代になると技術の進歩とともに、社会的分業がみられ、道具を作る専業集団があらわれてきました。

上田市では、上田原遺跡や小泉の琵琶塚遺跡、下武石の上平遺跡から鉄斧・鉄鋤・鉄劍・銅鏡・巴形銅器などの貴重な金属製品が出土しています。

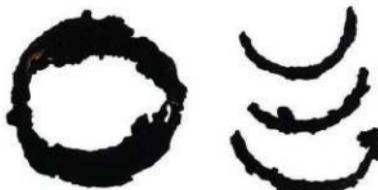


琵琶塚遺跡出土鉄斧



鉄鋤  
(鉄製の突き刺す武器)

銅鏡  
(銅製の矢じり)



鐵鏡 (鐵製の腕輪)  
上田原遺跡出土金属製品 (弥生時代後期)



巴形銅器  
(上田市下武石の上平跡)  
(青銅製の飾り金具で盾などにつけられた)



岳の鼻遺跡出土 石包丁  
(稻の穂を摘みとる道具)

### 弥生人と墓

弥生時代の墓としては、北九州地方に  
斂棺墓が多く、その他の地方では箱式  
石棺墓がみられます。信濃では地面に穴  
を掘った土塚墓が一般的ですが、弥生時  
代の後期になると周囲に溝を掘り、中心  
をもりあげ、その土盛りの中に遺体を埋  
葬する円形周溝墓や方形周溝墓があらわ  
れます。この墓は次の時代には土をもり  
あげた古墳に発達すると考えられています  
が、このような墓をつくることができ  
る有力者があらわれてきたと想像されま  
す。上田市では上田原遺跡で、円形周溝墓・  
方形周溝墓がそれぞれ2基ずつ出土しています。



上田原遺跡の円形周溝墓



上田市筎井掛ノ宮出土の底部穿孔土器



### 底部穿孔土器

壺形土器の底部に故意に穴  
をあけたもので、方形周溝墓  
などから出土する例がみられ  
ます。この土器は、葬送儀礼  
に用いられたものであろうと  
いわれ、埴輪の初源的なもの  
とも考えられます。

# くにのはじまり

弥生時代にはじまった農業は、池や堰をつくったり、鉄の農具を使用してしだいに発達しました。しかし、池や堰をつくるには多くの人の協力が必要です。そこで人々は集団で生活するようになり、この中の力のあるものが支配者となりました。こうして生まれた支配者の治める、一定の地域が「くに」と呼ばれるようになりました。支配者層は自己の勢力を示すために大きな墓を築き、古墳と呼ばれています。



二子塚古墳

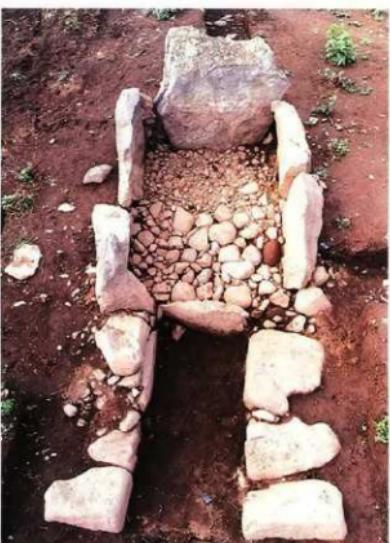
## 二子塚古墳 〈上田市上田秋葉裏〉

太郎山に源を発する黄金沢の扇状地につくられた、上田地方でただ1基確認される前方後円墳です。この古墳は4基の陪塚と伝えられる小古墳をもち、この地方の6世紀前半の有力な豪族の墓です。全長は約49m、高さは約5mあります。

## 人びとの暮らし

大きな前方後円形の古墳が多数つくられたのは5世紀代（今から1,500年前）で、全国にたくさん残っています。そのようなところにはいくつかの「くに」があり、その「くに」の支配者は強大な勢力をもち、りっぱな居館は住んでいました。しかし大部分の人々は、やはり竪穴式の家に住みカマドを築いて生活をしていたのです。この時代の生活に使われた容器は、弥生時代からの土師器や、大陸から伝わった窯を用いて焼いた硬い焼きものである須恵器でした。

こうした古墳はおよそ3世紀後半から7世紀後半まで約400年間にわたって築かれ、この時代を古墳時代と呼んでいます。古墳時代は前期（3世紀後半～4世紀後半）、中期（5世紀）、後期（6世紀・7世紀）の3期に区分されています。



下郷第2号古墳石室 〈上田市殿城〉



林之郷遺跡第23号住居跡（上田市林之郷）  
(多数の土師器が出土した古墳時代後期の住居跡)



林之郷遺跡第23号住居跡のカマド付近（壺・高环・环などの食器類が出土）

## 土師器

弥生土器の流れを受けた土器で、古墳時代から平安時代まで長く使われており、赤褐色をした素焼の土器をいいます。古墳時代には壺・甕・長胴甕・壇・环・高环・甑などさまざまな形のものが使われていました。奈良時代には、环（碗より浅く、皿よりも深い食器）が規格化・量産化されます。8世紀後半からはロクロを使用して製作し、底部に糸切りの痕跡がみられます。

## 須恵器

5世紀の前半には、ロクロを用いて成形し、窯（斜面に築かれたトンネル状の窯）で焼きあげた須恵器が朝鮮半島から伝来します。1,000度以上の高火度で焼成のため、青灰色をした硬い焼きをしています。古墳時代の須恵器には、壺・高环・甕・甑・器台などがあり、奈良時代以降になると硯や瓦塔などさまざまな形のものが焼かれています。

## 上田盆地の古墳

上田盆地に最初に古墳が造られるようになったのは、4世紀末から5世紀前半に築かれた秋和の大藏京古墳です。一辺が約34m、高さが約8mの方墳です。つづいて塩田新町の王子塚古墳が、5世紀中葉から6世紀前葉の築造とみられます。  
この古墳は帆立貝式古墳（前方部が短く平面形が帆立貝形）に分類され、全長が50.8mあり、上田地方で最大の古墳です。6世紀前半には、上田市新田の二子塚古墳（前方後円墳）があります。古墳が最も多く造られるようになったのは古墳時代の終末期といわれる6世紀末から7世紀代になってからで、上田市殿城の赤坂将軍塚古墳、下之郷の下之郷古墳群や神科新屋の矢花古墳群、真田町本原の藤沢古墳群など、横穴石室をもつ円墳が多数造されました。



大藏京古墳（上田市秋和）



王子塚（上田市塩田新町）



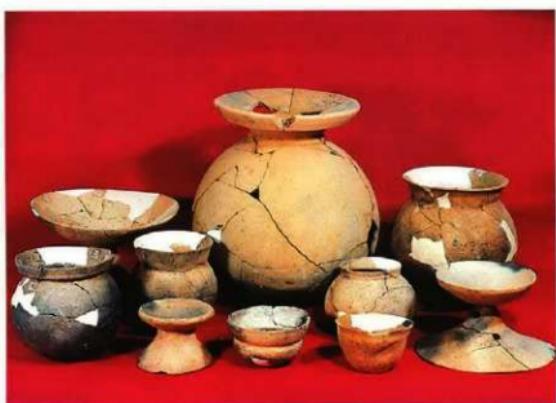
藤沢古墳群（上田市真田町本原）

## 信濃国の成立

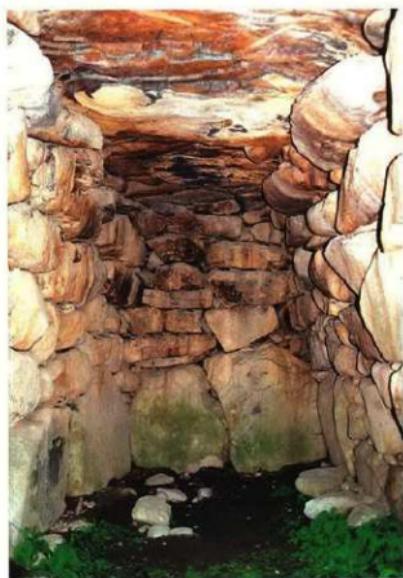
5世紀ごろ盛んにつくられた大古墳は、7世紀（1.300年前）ごろになるとだんだん小さくなり、小古墳が集まつた「群集墳」が多くなります。これは古墳を築く力のある人たちが多くなったことを物語っています。このころになると、大和國（奈良県）を拠点とした大和政權が大きな力をもち、各地に勢力をのばしていきました。わが野科（信濃）の国も、はじめの形はこのころに成立したものと考えられています。



他田塚古墳（上田市下之郷）



林之郷遺跡第6号住居跡出土土器



他田塚古墳石室〈上田市下之郷〉



下之郷の塚穴原第一号古墳出土小玉



小泉の八幡山遺跡出土人物埴輪頭部



直刀



柄頭



柄巻板

塚穴原第一号古墳出土直刀・刀装具



殿城の城山古墳出土金環（耳飾り）



塚穴原第一号古墳出土鞍金具

蕨訪形の森ノ木古墳出土  
鐵鏡



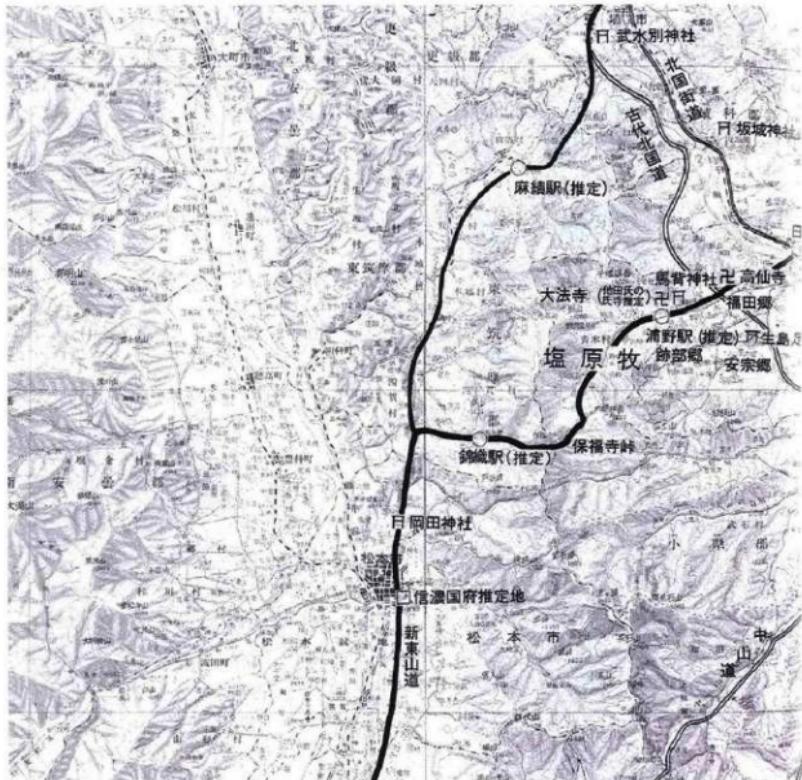
だいつけわん・おた



ひらびん

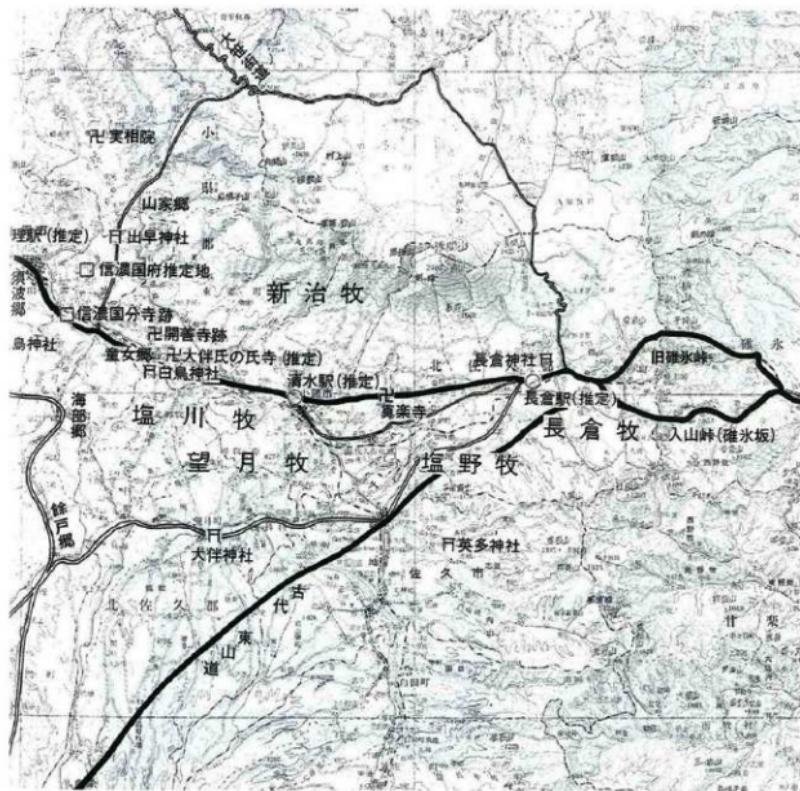
塚穴原第一号古墳出土須恵器

# 古代の信濃



## 古代東山道（古東山道）

大和政権の勢力は、次第に強大となり、ついには全国各地を支配するようになりました。そのために必要な道が方々に開かれましたが、科野（信濃）の国へも重要な道が通じました。それが東山道です。後に新しい東山道が開かれますので、当初の東山道を「古代東山道」（あるいは「古東山道」と呼んでいます。古代東山道は、都から美濃（岐阜県）を通り、神坂峠をこえて科野（信濃）へ入り、伊那・諏訪・小県・佐久の各郡を経て、関東・奥羽地方へ向かっていたと推定されています。



### 東山道（令制東山道）

全国が大和政権によって統一されたころ、科野（信濃）国には、新しい東山道が開かれました。これを単に「東山道」、あるいは「令制東山道」、「官道」といいます。伊那郡までは「古代東山道」と同じですが、それから筑摩郡に入り保福寺峠をこえて、上田・小県地方を通過することになりました。所々に駅があり足利・十五疋という馬をそなえていて役人などを運びました。上田・小県地方には浦野駅（青木村に推定）、日理駅（上田市常磐城に推定）がありました。その後信濃国分寺の南側を通り、小諸市諸に推定される清水駅、軽井沢町長倉神社周辺、あるいは鉢削屋造跡群がある御代田町小田井付近に推定される長倉駅を経て、旧碓氷峠あるいは入山峠をこえて上野国（群馬県）に向かう東山道ルートが推定されています。

## 信濃国

信濃国の名は「古事記」上巻国譜の条に最初にみられます。ここでは「科野國」と記されています。このように、「科野」の名は古くからあったものと考えられ、おそらく現在の千曲地方を中心とした上田盆地から善光寺平にかけての千曲川中流域に発生した「くに」が、その母体となつたものとみられます。

「科野」という語源には、科の木が多い所であったとか、長戸辺の神が風の神であることから風の強い高原の意であるとか、坂（傾斜地・河岸段丘など）の多いところであるためとか、篠の生いしげったクニをあらわすなど、いろいろな考え方があります。

「信濃國」と名が改められたのは、大宝元年（701年）の大宝律令を経て、大宝4（704）年の国印の制定によるとみられます。この信濃國は伊那・諏訪・筑摩・安曇・水内・高井・埴科・更級・小県・佐久の10郡から成っていました。

## 信濃の国造

国造といふのは、各地方を支配するために、大和政権が有力者に与えた身分です。科野国造は大和平野の中心に勢力をもっていた多氏の系統であるとも考えられています。多氏は天皇家の子孫といわれ、九州の阿蘇山の麓から大和へきた氏族と推測されています。その一族が上田地方の塩田へ来て国造となり、植田氏・金刺氏などに分れたとも考えられています。いまも塩田に阿曾岡（阿曾岡と表記）という場所があり、多氏の故郷の名を残したものともみられています。



塩田の阿曾岡遠景

## 生島足島神社

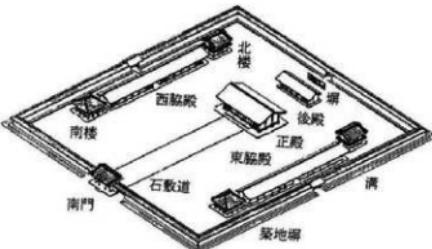


下之郷の生島足島神社

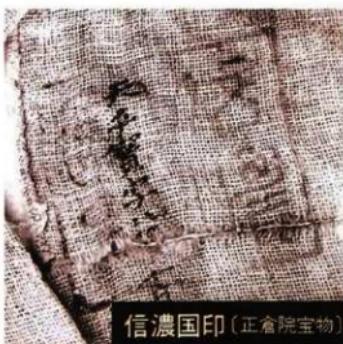
上田市塩田の下之郷にある生島足島神社周辺には、科野（信濃）国造が居館をかまえていた場所と推定されています。この神社には生島神・足島神という二座の神が祀られていますが、この神々はもともと宮中（天皇家）に祀られている神々です。国造となった多氏の一族がはるばる都からお迎えして祀ったものでしょうか。この二神のご神体は大地であるといわれ、また本殿は池の中の島にあります。神社の姿としては、もっとも古い形態をとどめるとされています。

## 信濃国府

東山道は、大和政権と東國（東日本）を結ぶためのもっとも重要な交通路でした。この道に沿って国々に国府が置かれました。国府とは、現在の県庁に当たる役所で、その国の政治の中心地です。科野（信濃）国の最初の国府は上田地方に置かれたと推定されていますが、その場所は不明です。現在条里的遺構が残る上田市神科台地と、常田の信州大学織維学部敷地や今信濃国分寺周辺に推定されています。



（「信濃国府跡発掘調査概報」倉吉市教育委員会1975年より）



信濃国印（正倉院宝物）

## 大和政権と信濃

もともと信濃は大和政権と深い関係にありました。奈良の正倉院宝物の中には、地方から朝廷に納めた布などがたくさんありますが、信濃からのものは常陸・武藏に次いで多くあります。それらには「信濃国印」が押してあり、上田にあった信濃国府から送られたものと推定されます。中には海野郷（今の東御市）爪工部という人の名が書かれたものがあり、宮中に用いた翳（貴人にさしかけて顔をおおうもの）を作成した人々、あるいはこうした技術者を養った人々が、この地方に住んでいたことが推測されています。

## 信濃路のうた

しなのじ  
信濃道は今の築道刈株に

あしづ  
足踏ましむる履はけわが背

信濃国府が上田にあったころ、信濃国から国を守るために、たくさんの人々が「防人」として召集されて、北九州へ行きました。それらの人々の歌が、万葉集などにいくつも残っています。この歌もそのひとつで、東山道の保福寺峠を越えていく夫のことを心配してその妻が詠んだものとされています。夫を思う妻の切々とした愛情がにじみ出ている歌として有名です。

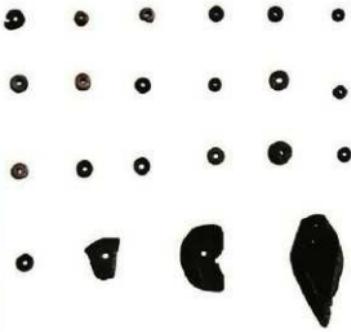
歌の意味「信濃の峠道はこのごろ切り開いたばかりと聞いております。どうかしっかり道をはいて、足を痛めぬように行って下さい。」



保福寺峠付近



大門峠付近



雨境峠出土石製模造品（立科町）

## 大門峠

諏訪と小県・佐久をむすぶ標高1,443mの峠で、車山の東側鞍部を通っていたと推定されています。諏訪の山浦地方から雨境峠に通じていた古代東山道は、この峠から小県郡に置かれていた信濃国府に通する道が分かれていたとみられます。

この峠付近からは、多くの祭祀遺物が発見されています。



入山峠付近



入山峠出土石製模造品（軽井沢町）

## 入山峠（碓氷坂）

現在の軽井沢町境新田と群馬県碓氷郡松井田町入山との間にある標高1,038mの峠で、古代東山道は石製模造品などの出土から、この峠を越えて上野国に通じていたとみられています。『万葉集』の東歌にも「日の暮に碓氷の山を越ゆる日は、背なのが袖もさやに振らしつ」と歌われ、神坂峠（碓氷坂）、保福寺峠と並ぶ難所でもありました。なお令制東山道は熊野皇大神社のある旧碓氷峠を通過していたとの説もあり、旧碓氷峠あるいは入山峠を経る東山道ルートが推測されています。

## 牧寄

牧寄遺跡は、保福寺峠を越えた東山道が上田・小県地方の平坦部にかかる地点にあります。天神山東斜面の台地上に、東西3間、南北1間の掘立柱建物遺構が発見されました。

また、ここからは、土師器・須恵器・陶器などの平安時代から中世にかけての遺物が出土しています。この地帯は「塩原牧」があった地域と推定されていることから、この牧に関係のあった建物跡と考えられています。



曰理駅跡推定地の塔心礎（上田市常磐城）



牧寄遺跡出土柱根



曰理駅跡推定地出土瓦塔片

## 曰理駅

千曲川畔に設けられた駅で、伝馬10疋をそなえていました。その場所は、現在の上田市常磐城に推定されており、そこには塔心礎が置かれ、近くから瓦塔片も発見されていることから、東山道の渡河地点に布施屋の性格をもった寺院があったと推定されています。

# 佛教信濃へ

## 佛教信濃へ入る

古代東山道、令制東山道はいずれも中央と信濃をむすぶ大切な道でした。政治上重要であつたばかりでなく、中央の文化もつぎつぎにこの道を通じて信濃へ入ってきました。たとえば善光寺（長野市）の境内から白鳳期（7世紀後葉～8世紀初頭）の瓦が発見されていることは、仏教が日本へ伝わってから間もなく、この信濃の地へも入ってきたことを物語っています。



善光寺（長野市）



善光寺境内出土鉢瓦・漆板  
(複製品 原資料長野市立博物館所蔵)



重文 銅造觀音菩薩立像（上田市長福寺所蔵）  
(像高36.7cm・7世紀後半の飛鳥時代後期)

## 氏寺

佛教が信濃に入ってくると、まず信仰したのは各地の豪族です。奈良時代にできた「日本靈異記」という書物には信濃国小県郡の話が二話ものせられています。ひとつは童女郷（現在の東御市）に大伴氏、ひとつは跡部郷（現在の青木村から川西地方）に他田氏という豪族がいて、氏寺を建てたり仏を信仰したりした話です。いま信濃に残る7世紀代の飛鳥時代の古仏は、いずれもその土地の豪族の氏寺（一族の寺）に安置されていたものとみられています。

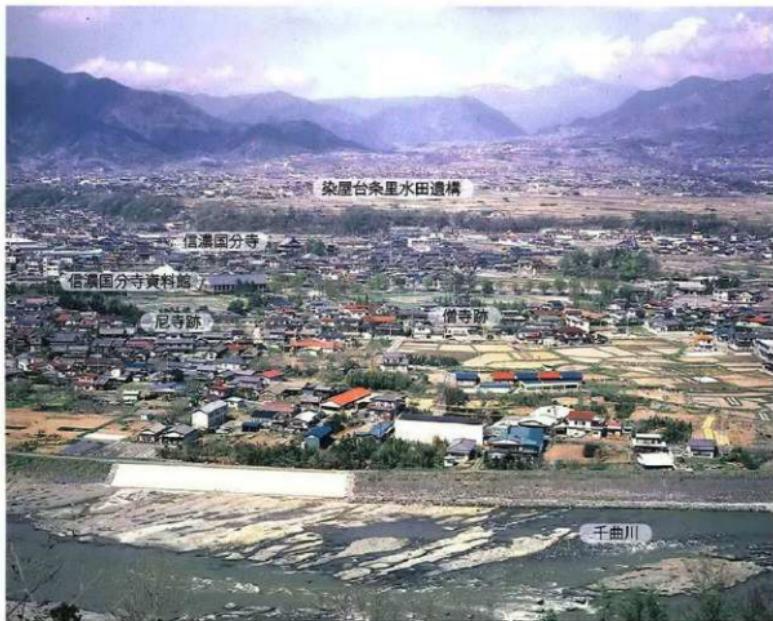
# 信濃国分寺

## 信濃国分寺の創建

奈良時代の文化で一番大きな出来事は、聖武天皇の詔で全國に國分寺が建てられたことです。天皇は國家が安らかに栄えることを祈るために、國ごとに國分寺（僧寺と尼寺があります）を建立し、その總國分寺として奈良に東大寺を建てました。しかし國分寺というのは、とても大きな寺院ですからどこの国でもそうやすやすとは建てられませんでした。信濃國分寺も建立に着手してから完成するまでには、20余年かかったであろうといわれています。



東大寺大仏殿〈奈良市〉

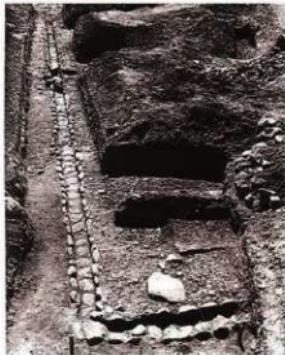


信濃國分寺跡遠景

## 僧寺の発掘

信濃国分寺が建てられた場所は、現在の信濃国分寺の位置ではなく、その南の段丘下の水田・畑地と推定されています。そこでの発掘調査が始められたのは昭和38年のことです。

そして9年にわたる大がかりな調査の結果、みごとに信濃国分寺僧寺跡が発見されました。たくさんの瓦とともに礎石・雨落溝などつづきと掘り出され、金堂・講堂・南大門・中門・廻廊・塔などをもつ一辺が約178mもある大きな伽藍地（境内）であることがわかりました。



金堂跡（東北隅と東側の雨落溝遺構）



発掘調査前の僧寺跡（昭和38年）



金堂跡



中門跡（西南隅と南廻廊）



講堂跡（南側の雨落溝遺構）



塔跡



講堂跡

## 尼寺の発掘

国分寺には僧寺と尼寺がありますが、信濃国分寺の尼寺の所在地にはいろいろな説があり、確かなことはわかっていませんでした。ところが古い文書の調査から僧寺跡の西方に尼寺の跡ではないかとみられる所が見つかり、僧寺跡につづいて発掘調査が始められました。そこからは、金堂・講堂・中門・廻廊・経蔵・築地塀などまできれいに掘り出され、僧寺とほとんど同じ大きさの建物があったことが明らかになりました。



中門跡西側の調査状況（昭和44年）



中門跡東側の瓦出土状況



経蔵跡内部



金堂跡（東南隅と東側の雨落溝遺構）



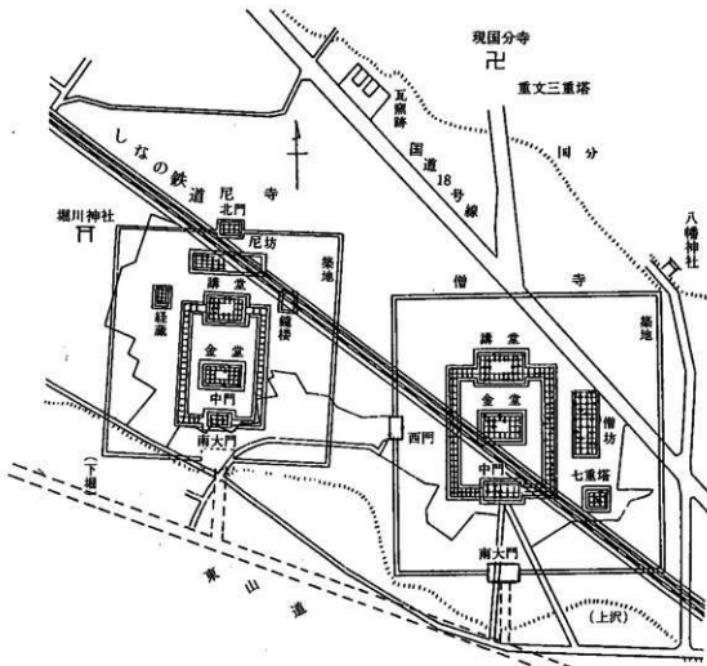
金堂跡の東側雨落溝遺構と羽目石



講堂跡の基壇南側内部



金堂跡の基壇内部（東側部分）



信濃国分寺・尼寺伽藍配置図（奈良時代）

### 信濃国分寺の伽藍地と伽藍の規模

#### 僧寺

金堂	東西 176.56m	南北 2.0m (100間四方)
南門	南北 178.05m	柱間7間
正面	正面 29.20m	柱間7間 (3.2+3.5+3.5+4.0+3.5+3.5+3.2)m
側面	侧面 19.20m	柱間4間 (3.2+4.0+4.0+3.2)m
講堂	正面 34.00m	柱間9間 (3.1+3.1+3.2+3.2+3.2+3.2+3.1+3.1)m
佛殿	正面 20.05m	柱間4間 (3.1+3.9+3.9+3.1)m
塔	正面 20.80m	柱間5間 (3.3+3.8+3.8+3.8+3.3)m
正門	正面 9.40m	柱間3間 (2.55+2.55)m
中門基壇	側面 8.10m	柱間2間 (2.65+2.55)m
(復) 廊	長さ	講堂から19.88m 祖國5間 (3.3+3.3+3.3+3.3+2.55+2.55)m 折れて中門へ24.5m 祖國8間 (2.55+2.55+(3.0×5間)+2.5)m
側廊	正面 39.00m (推定)	柱間11間 (3.0×5間)+4.2+(3.0×5間)m
側面	14.40m	柱間4間 (2.4×4間)m

#### 尼寺

金堂	東西 148.0m	南北 2.0m (80間四方)
南門	南北 150.0m	
正門	正面 29.70m	柱間7間 (3.0+3.2+3.2+3.6+3.2+3.2+3.0)m
側面	侧面 19.50m	柱間4間 (3.0+3.2+3.2+3.0)m
講堂	正面 31.00m	柱間7間 (3.0+3.0+3.2+3.8+3.2+3.0+3.0)m
佛殿	正面 21.60m	柱間4間 (3.0+3.2+3.2+3.0)m
中門	正面 19.00m	柱間3間 (3.8+4.2+3.8)m
基壇	側面 13.60m	柱間2間 (3.2+3.2)m
尼寺	正面 51.00m	柱間11間 (3.6×5間)+8.0+(3.6×5間)m
正門	侧面 14.10m	柱間3間 (2.7+2.7+2.7)m
北門	正面 16.00	柱間3間 (2.0+4.0+4.0)m
基壇	側面 12.00	柱間2間 (3.0+3.0)m
經藏	正面 12.00m	柱間2間 (3.0+3.0)m
佛殿	側面 11.40m	柱間3間 (3.6+3.6+3.6)m
廻廊(東廊)	基壇	幅6.80m 柱間1間 (3.2)m

長さ 講堂から13.4m 柱間3間 (2.0+3.2+3.2+3.2)m  
折れて6.40m 柱間20間 (3.2×20間)m  
折れて中門へ12.8m 柱間5間 (3.2×5間)

#### 僧寺と尼寺の関係

僧寺 東偏3° 12' 尼寺 東偏5° 13' (いづれも中心線)

僧寺金堂を中心とする南北までの長さは東108.0m、西68.56m、南94.25m、北83.80mで中軸線は西偏している。  
尼寺金堂の中心から北門棊地までは90.00mで、南大門までは60.00mと推定される。

東棊地までは、74.00mである。

僧寺中軸線(講堂)と尼寺中軸線(金堂)はほぼ東西に並び181.46m(約100間)である。  
僧寺棊地と尼寺棊地までは約40.00mで近接している。

信濃国分寺跡から出土した遺物



八葉複弁蓮花文鏡瓦（創建瓦）



均齊唐草文字瓦（創建瓦）



有段式丸瓦



平瓦（縄叩き目）

僧寺跡出土



文字瓦（尼寺東門地区出土）



均齊蓮花文字瓦（信濃国分寺二号瓦窯跡出土）



文字瓦「伊」（尼寺金堂跡出土）  
「伊」は伊那郡を示し、伊那郡が経費  
を負担した瓦であることを表してい  
るといわれます。



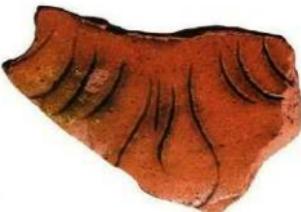
三重圓文鎧瓦（尼寺金堂跡南側出土）



四葉単弁蓮花鎧瓦（尼寺金堂跡南側出土）  
尼寺跡・瓦窯跡出土



和同開珎（尼寺回廊跡出土）  
和同元年（708年）に最初に発行された貨幣で、  
當本銭に次いで古い貨幣です。



緑釉陶器（香炉のふた）



鉄釘  
60本をこえる鉄釘が出土し  
ています。いずれも角釘で  
長いものは29cmあります。



墨書き器「講院」（9世紀）  
尼寺跡の西側に隣接する明神前遺跡から出土しました。  
「講院」は講師院の略称とされ、仏道修行の中心となっていた講師の居所を示す墨書きとみられます。



青磁蓮弁文碗（平安時代後期）



素文鬼瓦  
文様のない鬼瓦で、補修用に用いられたとみ  
られています。



丸面鏡（円形をした鏡）



「二寺之堂」と記された古文書  
江戸時代の享保年間（1716年～  
1736年）とみられる古文書です。「二  
寺之堂」という所の畠から出た輪のある  
石を今月三日に当寺の薬師堂の前に引  
き取りました。云々」という内容で、  
尼寺発見の手がかりとなりました。

### 信濃国分寺跡出土の遺物

国分寺跡からは、古瓦をはじめ須恵器・土師器など多くの遺物が出土しました。国分寺の創建期の瓦には、八葉複弁蓮花文鏡瓦と均齊唐草文字瓦、それに縄目文の平瓦が用いられ、後の補修用には素文の鬼瓦が使われました。この八葉複弁蓮花文鏡瓦は東大寺や興福寺出土のものと、均齊唐草文字瓦には「伊」・「更」など郡名を表したとみなされるものもあります。周辺建物には、坂城町の土井ノ入窯跡で発見されている蕨手文鏡瓦などが一部で使用されました。

土師器・須恵器は8世紀から10世紀にかけての資料が主に出土しており、僧房跡・尼房跡から  
は国分寺の生活に使われたと推定される土器が多数出土しています。また、灰釉陶器や円面鏡・  
鉄釘なども発見されています。

## が ようあと 瓦窯跡

この国分寺跡の北側200mの崖の下に、瓦を焼いた窯の跡がみつかりました。東西に2基並んでいることがわかりましたが、東側のものは埋めて保存し、現在西側の窯だけ観察できるようにしてあります。

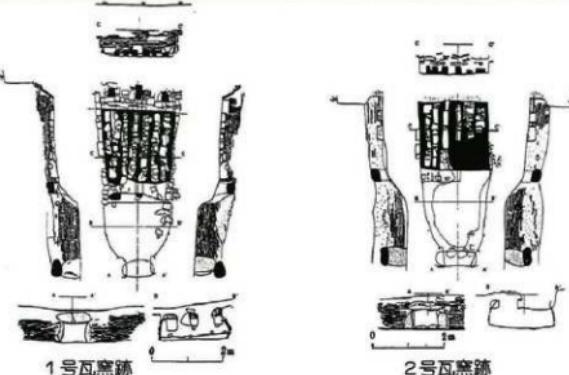
これはロストル式平窯という形式で、国分寺を建てたときの瓦や修理用の瓦を焼いたものと推定されています。

周辺からは須恵器も出土しており、当初は瓦陶兼業窯として築かれた可能性が推測されています。

### 各窯の計測値

1号窯跡	現在長	約4.6 m
燃焼室	奥行	2.4m
	隔壁部幅	1.8m
	窓口 幅	0.9m
	窓口 高さ	0.5m
	窯の高さ	0.65m (窓より天井まで)
	隔壁の厚さ	0.3m
	通焰孔	3個
焼成室	奥行 (現存)	1.9m
	幅	1.9m
	床 (ロストル)	3本 (高さ平均20cm) 横枠材は切石・川原石・男瓦・女瓦

2号窯跡	全長	5.4m
燃焼室	奥行	2.4m
	隔壁部幅	1.9m
	窓口 幅	0.7m
	窓口 高さ	0.54m
	窯の高さ	0.65m
	隔壁の厚さ	0.3m
	通焰孔	3個
焼成室	奥行	2.0m
	隔壁部幅	1.8m
	隔壁部幅	2.0m
	窓口厚さ	0.7m
	構造	20×20 cm
	床 (ロストル)	7本 (高さ平均20cm) 横枠材は切石・川原石・男瓦・女瓦



瓦窯跡からは、蕨手文鏡瓦、均齊蓮花文字瓦、正格子文平瓦、素文鬼瓦脚部が出土しています。これからの中にはいずれも8世紀後半のもので、蕨手文鏡瓦は坂城町土井ノ入窯跡出土のものと同じものです。このことから、この国分寺瓦窯は土井ノ入窯跡の工人が築いて操業したものと考えられています。

窯構築材には創建期と考えられる縄目文系平瓦と押型文系平瓦が使われていました。



文字瓦「更」

更級郡が経費を負担した瓦であることを示すと推定されています。



信濃国分寺瓦窯跡出土均齊蓮花文字瓦

## 土井ノ入窯跡

土井ノ入窯跡は、坂城町土井ノ入地籍に発見されました。昭和41年の発掘調査によると、窯跡二基が併存しており、燃焼部、焼成部の床面・壁面が検出され、窯前方地下から瓦片が出土しました。この瓦の中には、尼寺跡出土の蕨手文鏡瓦、国分寺瓦窯跡出土の均齊蓮花文字瓦と同じものがみられます。このことから、この窯では奈良時代後期から平安時代初期にかけて、この地方の寺院に使用された瓦や須恵器を製造していたことが推測されています。



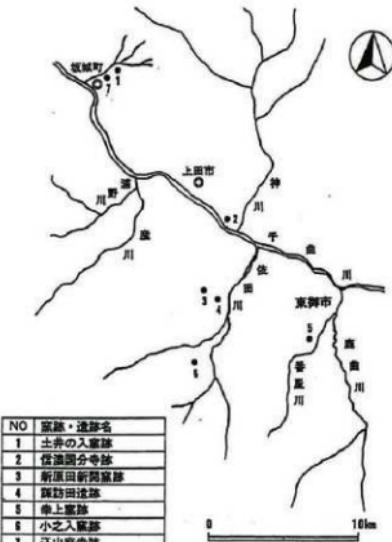
土井ノ入窯跡出土蕨手文鏡瓦

## 信濃国分寺跡の関係古窯跡群

8世紀後半に、信濃国分寺に瓦や須恵器を供給したと推定される窯跡は、坂城町の土井ノ入窯跡をはじめ、上田市丸子地域の依田古窯跡群、武石地域の小之入窯跡群、東御市中八重原の幸上窯跡群があげられます。このうち依田古窯跡群の新原田新開窯跡では、信濃国分寺跡出土平瓦と同一とみられる縄叩き目の平瓦が33点出土しています。また幸上窯跡群では、信濃国分寺尼寺金堂跡出土の斜状平行叩き目の平瓦と同一とみられる平瓦が出土しており、信濃国分寺の建立に際して瓦を供給したと推定されます。こうした窯跡群からは依田川・千曲川・番屋川などの河川を利用して、舟で大量に瓦を運んだとみられます。



上田市依田古窯跡群分布図



信濃国分寺跡の関係古窯跡群位置図



上田市武石鳥屋の小之入窯跡群調査状況（須恵器の环や円面鏡が出土）

## 信濃国分寺跡北方の国分遺跡群の調査

上田市国分の国分遺跡群では、平成11年に現在の信濃国分寺本堂北西側約100mの地点で発掘調査が行われ、南北に通じる幅約9mの古代の道路状遺構が検出されました。この両側に側溝をもつ道路状遺構の延長は、僧寺跡、尼寺跡の中間を通り、この南側に想定される東山道に合流する可能性が推定されています。この遺構は8世紀後半に幅約6mで築かれ、その後9世紀初頭に拡幅されて幅約9mとなり、10世紀前半頃まで存続したとみられています。周辺からは南北方向に主軸を沿えた7棟の掘立柱建物群や、信濃国分寺跡からは出土しなかった十葉（九葉）（九葉）単弁蓮花文鏡瓦・（九葉）九葉素弁蓮花文鏡瓦などが出土しました。



国分遺跡群出土の古代の道路状遺構（上田市国分）



国分遺跡群出土の十葉（九葉）単弁蓮花文鏡瓦

## 信濃国分寺僧寺南大門跡・西門跡の調査

平成12年度からは信濃国分寺跡の保存整備をさらに図るため、上田市教育委員会により発掘調査が継続的に実施されています。その結果、平成12年・14年・15年に僧寺北東域の調査が行われ、川原石を敷き詰めた石敷遺構や南北に主軸を描えた掘立柱建物跡が4棟検出されました。平成16年には間口3間(10.5m)、奥行2間(6.6mないしは6.9m)<sup>さう</sup>の八脚門と推定される僧寺南大門跡<sup>はりょうこうぐべん</sup>が確認されました。この周辺からは創建期の八葉複弁蓮文鏡瓦<sup>はちようふくべんれんぶんきょうわ</sup>をはじめ瓦類が出土し、瓦葺<sup>かぢあわせ</sup>の南大門が想定されています。また平成18年には僧寺西門跡が検出され、その付近からは九九算の「七九六十三」をヘラ書きした文字瓦<sup>じゆじゅう</sup>が出土しました。瓦を製作する職人(瓦工)が九九算を習うために書いた習書とみられます



僧寺南大門跡調査状況



八葉複弁蓮文鏡瓦（僧寺南大門跡）



九九算「七九六十三」の文字瓦（僧寺西門跡付近）

## 奈良・平安時代の人々の生活

壮大な国分寺の建てられたころ、一般の人々は、どんな家に住んでいたのでしょうか。

この上田地方から発掘された例によりますと、穴を掘ってその上に草ぶきの屋根をかけた堅穴式というつくりで、中にカマドがあり、もの煮たり、暖をとったりしていました。また食事をしたり、穀物を貯えたりするには、土器師、須恵器というような土器を使って生活していました。なお、上田市殿城の法楽寺遺跡からは平安時代後期の金銅三尊仏や器が出土し、仏教信仰の広まりがうかがえます。



高田遺跡の平安時代の堅穴住居跡（上田市小泉）



堅穴住居のカマド復元模型



法楽寺遺跡出土金銅三尊仏  
(上田市殿城)

## 国分寺の衰え

承平8（938）年というと、国分寺建立の詔が出されたときから約200年後のことです。この年、関東地方の大勢力者、平将門が平貞盛の軍勢と、信濃国分寺の近くで戦ったと史書の「將門記」にあります。信濃国分寺はこの戦火で焼けたと伝えられていますが、確かなことはわかりません。しかし尼寺跡の近くに発掘された平安時代後期の住居跡では、国分寺の平瓦をカマドに使っていました。このためこの頃には国分寺は衰退したとみられています。



平将門と平貞盛の戦い（想定図）

## 現在の信濃国分寺（八日堂）

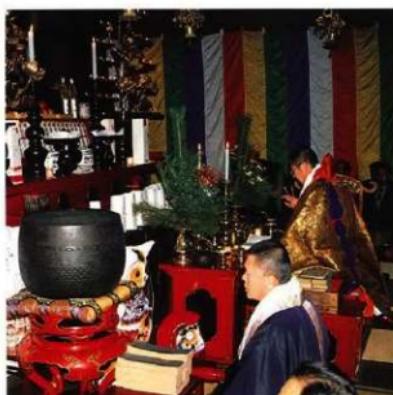
奈良時代に建てられた信濃国分寺が衰えてしまったと、この地方の民衆によって、平安時代後期には一段上の平地に新しく寺が建てられ、国分寺の伝統を受け継ぐことになりました。これが現在の信濃国分寺です。さらに鎌倉時代の初めには、源頼朝がその再建に力を尽くしたという伝承があります。お釈迦様だった本尊もお薬師様となり民衆の寺として生まれかわり、今日に至っています。毎月8日には金光明最勝王經の読経がありますので、八日堂ともいわれています。



信濃国分寺薬師堂（長野県宝）



八日堂縁日図（市指定文化財）



八日堂縁日の護摩の法要

## 八日堂縁日図

現信濃國分寺に伝わる昔の八日堂縁日の様子を描いた貴重な絵画です。江戸時代中期初め頃のものと推定され、蘇民符来符、宝槌、包丁、釘ぬき、まないた、山島、千鷺など日用品や食料品がならび、武士をはじめ、商人、農民、頬かむりの男、きせるをもつ男、易者、乞食にいたるまで民衆のありさまがよく描かれています。全体で363人の人々が数えられます。八日堂といわれた信濃國分寺がどのように人々から信仰されていたか、江戸時代の縁日の様子を詳細に知ることができます。